

風俗文選大註解 貳之下

5639
4
~5



3 80 1 2 3 4 5 6 7 8 9 90 1 2 3 4 5 6 7 8 9 100 1 2 3 4 5 6 7

門 5
號 5639
卷 4

五
歌
函

風俗文選大註解卷之貳下

江都 薩雪庵午心門人

薩甘外哉著

富士賦

不二^{トモシテ}日本^{ヒンボク}の蓬萊山也。昔孝靈^{カウレイ}五年山を一めて現^{ケル}。徐福^{スラフ}より山^{アリ}て仙藥^{セイヤク}をりめかくや。娘^{ムネ}も神^ジと化^{ハシメテ}るよ靈^リをともむ。

孝靈天皇 大日本根彦太瓊杵尊^{オホニマトココシコトノミコト} 乙亥^{ミコト}五年近江国地^{アシカ}て

湖^{コトコト}同時 不二山^{トモシ}現^ス

鷦氏筆來曰 日本^{ヒンボク}東北數千里山あり不二と号く又蓬萊と云ふ中^{トモシ}て三面皆海^{シマ}ありて山上^{アリ}に火煙あり秦の時徐福^{スラフ}入^スて藥^{ヤク}を求^ムひてすくらんとす。子孫秦氏と称す。余重物諸^シ申將^シく^シてゆ^リあるをかくやひめとえみ^シかひとのふ^リぬこととく^シきの^シのつ^シにゆ^リみそ^シてま^シひろ^シく^シらん^シてい^シあれかせ^シの^シてゆ^リき^シめ^シひ^シお^シひ^シす^シま^シう^シう^シお^シ上^シ遠^シ部



をめでりての山、天より近きと云ふせゆふあらんそういするの處ある
ふきんば都より天より近く作つてそのれをきをひかて
まよひよひよひよひよひよひよひよひよひよひよひよひよ
かのまの不死のあよえへ昇りて由使となま子ちよしよハ月のぼり
さとつ人をめつてすゝのふみあらむ山の峰をきよもつへきは
ひゆせひゆひゆ不死のくすりつやあらべて火と付てやくまよ
作つてすすりてのひゆ兵者もあらえ昇りて山のむづるよううん其山を不
死の山といふを多甚ひゆひゆ雲のや立ちのりまともが傳くる

峯ハ八葉よりて根ハ四列よりて百里よりて形けつゝる如くもきくわ斗リ
裾野より東西より長くて百里よりて山るゝ所を多く山上あらびと攀
近い後後よ旭をかやうる天より雪をつく山るゝ所を多く山上あらびと攀
和山異朝類すすりて三山名山と称して義楚六帖よ甚く不ぬく

八葉ハ薬師嶽 觀音嶽 地藏嶽 大日嶽 不動嶽 阿弥陀嶽
東迦嶽 四列ハ駿河 甲斐 相模伊豆 三口ハ吉田口 大宮口 甲府口

本朝文粹 富士山記

富士山者在駿河國、峯如削成直聳屬天其高
不可測歷覽史籍所記未有高於山者上也下畧
又貞觀十七年庚辰古きよりて名とづくの日午より天甚よく
晴作きて山巒をアヌ白衣の女二人山のいづきの上に舞ひ着
ふ山額をあらわす一尺余土人ともよアヌ

古老傳云山を不二と名くハ郡の名也山より神あり度君大神と云ひ出る
きみの雲表を極めて幾丈をあらひ頂上平地あり度さ一許里より
中央よりて鶴の脚くさきの底より神地あり地中大石あり石の體
あやし色純青其體のことをかへ湯の水を上づれ共遠くあり
てのむすの煙火をくらひ亦共頂上よりて池行生ア青細赤梗
一白砂山を成せりよあらの者股下よりてやうのあり達するを
ひひ白砂流ひをせざり相傳より居士とつるあら共いづき
よのむす得のちよちのりの者皆類と股のトコトチする泉あり股の
下より出逐々大河となり共流寒泉旱盈縮あらわす山東脚

下小山あり俗云を新山とすりて平地うる延暦二十一年三月雪霁冥十日よりのち山とすれど神の造也

羲楚六帖

後周齊列開元寺講俱舍論賜紫

明教大師進紹氏六帖

羲楚集

日本國亦名倭國東海ノ中秦ノ時徐福將五百童男五百童女止此國今人物一如長安中畧東北千余里有山名富士亦名蓬萊其山峻三面是海一采上聳頂有丈煙日中有諸室流下夜即却上常聞音樂徐福止此謂蓬萊至今子孫皆曰秦氏彼國無侵奪者龍神護法不殺久為過者配

在犯人島其他靈境名山不及一一記之

日本武尊伐東夷至駿河國浮島原與阿部市東夷敗尊訖

狩獵令遊御廣野一日中纏火于時十月之旬叢草枯死而宣添火

煌如塗油已進而尊之軍至危所帶之叢雲劍自拂拂歸火依之有草蘿ノ名

古事記傳其正乃みやつといつゝうさとまくはゆの肉太沼ありけりてある神いそくちくやぶる神なりとくよ其神をもあつて其神に入りつゝは其ののみやつ其のゆ火をもよつてゐるをあきひくゆゑあらへめて火燒傳比賣命の絵するは袋の口をときて見るへ火打と有りぬまよまよに佩刀をもて草を刈拂ひ其火をもて火をすすて而火をつけてやせとけてかよおきて其ののみやつとくよどみきりそー即ち火をつけてやせとひさ

源賴朝建久四年五月天下の武士を集て富士山牧將あり
嘗ての池を傍成の仇をとどり
さみづれハ其根も雪のくもれてあるさハ不二のくわくわく
山くもとるさの入度を仇をとどり
身我乞求の社弓我中村すあり

詣詣弓身小袖もつま

三

祐成、袖引のるせ、むらみゆう
祐牛やきもき、上の村もき、草風
鳴るむ其あくま、十郎、許
十郎より着のよさまあある
其角、柳後

父もく小兵すい

縫ひく、十郎のう祐、う節

立あらむね

かすめほふと、かすめ指の先

大破のやせをとせうと

けよナ十郎廢や、秋のくと、春友
きせ川も絶ち河よ虎も溝も一のた居
ノキモサキモハアえりあくやあきみ
母子でけうハアツト、つあゆり

照鏡のくわくや、秋の小ね、白

白

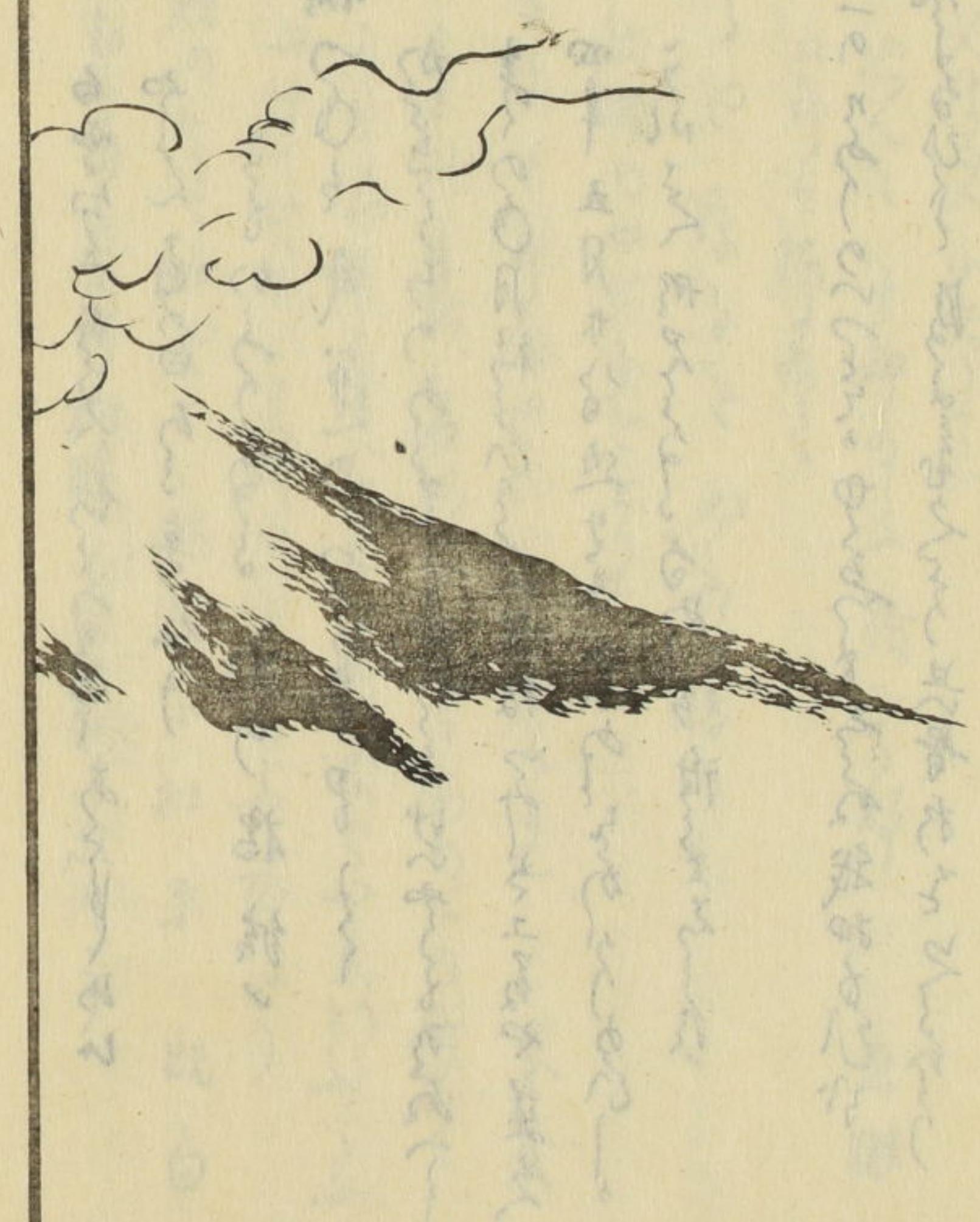
むかへよ考柳隣も圓坐せり

白雪句でなむへ何つりあくしめい
やんぬ日あくす信
こもかくゆる、やの橋結
祐つゆく武運つづき男
かくちのあくまがるけやくもまく
まの月祐へに果報年をユヌや達
四年五月十日近生きのひめをかくわい
かくく形足をすらめうれ

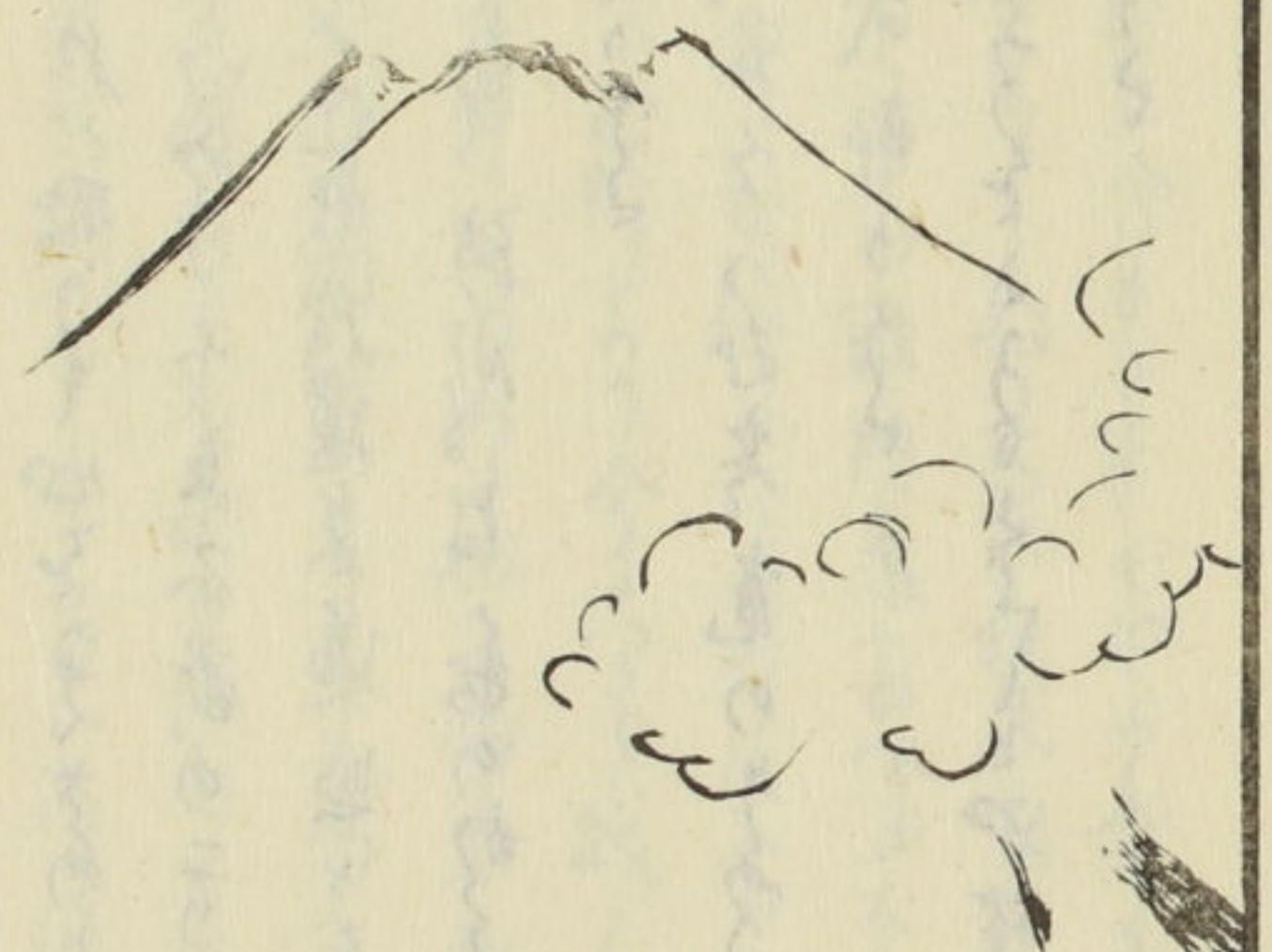
西行、五えま

すううう不二のううつもくやくもく我おもひ
上のふ文字を風するひくはくもく其骨おをとくひく
探幽と将野守信
更級日記よ其のまくせよとくまくとくひく
うんをくめうやく雪まくせよとくひくはくとくまくよ
きあくめうんやくよだくよのひくひくひくひく

或作子也。或作子也。或作子也。
或作子也。或作子也。或作子也。
或作子也。或作子也。或作子也。
或作子也。或作子也。或作子也。



法文寫真於室別寫真



或作子也。或作子也。或作子也。

或作子也。或作子也。或作子也。
或作子也。或作子也。或作子也。
或作子也。或作子也。或作子也。
或作子也。或作子也。或作子也。
或作子也。或作子也。或作子也。

クスの立のあらえられハ太のすゝもすも

古今集序 今ハ富士の山アタマトツヒ長柄の様アラリと
さくへり破よのそせをきさり。

景雅お、毛の申のむかよからずとつみ不二の山のタカヒシキム
今アリ長柄のはりあて落るあててくつむかうときくく行
ひむがよからずれハ歎コモ心をきさりといふん所也不二
山もアリアリヒトアリテ不立不斷のニリの心あり

不斷をアリヒトアリヒ歌拾遺集遍照

か錦枝ヨ一あら歌川。は秋のかみとくめをく

坂川流る首に實つ

年をゑて凡本アツム考龜のタケトツメ大草の里

監拾遺集和泉式部

さひまナクアシトヤサガラムキの山里
わらヰ井歌院

時有のなまひを今すくドトヤリアム莫ム不二の根の事
右四首遍照ミ實くとくノハ和泉式部雅政トドトやより
たる井あるハ不斷を用ひ雅政為家アモ不立不斷アリトヨヒラレ
トヨヘ不斷を用ひトソ秘一トハアリ首りするを正直アリトキテ宗
道アリ不二アリハむかより今より逃げぬる事無、不立トロムア
キモアリハ不斷を用ひタアリ松ヨ多葉為相あ人かアリ下向の付
回シテ不立の義を以テ為相幼おアリて父為家アガタ母阿佛ヨア生
ルアリル別ヨリハロ傳ヨリ不斷の義をすく不立トイテ短文愚昧
トヨモ代ヨリアリトモアリトモアリトモアリトモアリトモアリ
不便の事アリカモアリトモ不立不斷のお傳ヨリ果て俗宅の附冥戸母後
入道お傳ヨリアリ錦袈裟ヨリ始一通トヨホテニルせんあれ故民一部御
入道不立不斷アリロ傳アリトヨリすれどやん家の説不斷ヨリ
ナリトモアリ其状をアセアリトモアリ不立トヨリ累祖草つかケ

いうあきれり候んとつりのなう

雲々回水よ拂として一尺ハスの堤をともむ

一尺ハスをと坐雲とすむと我作牛心^{シテ}又あ交春秋藝庵梅笠曰坐のさ
一尺ハスの物^{シテ}坐雲のよみよりとくあく^{シテ}一尺の双柄^{ツカ}より一尺守
かくよ^{シテ}一尺ハス村とみてかくよ^{シテ}村とひよめり外我曰一尺ハスのま
坐雲う^{シテ}ハ吹^{シテ}と^{シテ}謎^{ナガ}尺ハ大軸 長サ一尺ハス故以爲^{シテ}一尺ハト
倭漢三戈圖會云颶^{ウニ}音具

南越志曰颶ハ臭四方之風也常以五六月一發未至時鷄犬為之

不鳴嶺表錄云秋夏之間有暈如虹謂之颶母蘇子瞻曰
斷霓飲海而北指赤雲夾日以南翔此颶之漸也其風發^{シテ}

輒拔木撤瓦舟楫漂蕩^{ヒヤウトウ}

勢列尾羽濃列彈列不時^{ハヤテ}暴風^{ハヤシ}りる有^シ俗是を一日連と
いふすち^{シテ}神風^{シテ}甚^シ吹^{シテ}や本をぬき扇^{シテ}を^{シテ}ト^{シテ}屋^{シテ}を崩^{シテ}破裂^{シテ}せんと
アリの^{シテ}易^シ崩^{シテ}多^シ山^{シテ}一日連の祠^{シテ}あり相列^{シテ}ラジ^{シテ}舞^{シテ}風^{シテ}
之^{シテ}破^{シテ}品^{シテ}を惡^{シテ}禪^{シテ}作^{シテ}の風^{シテ}と^{シテ}お借^{シテ}其^{シテ}神^{シテ}殺^{シテ}人の^{シテ}褐^{シテ}毛^{シテ}

禪定の人^{シテ}宝冠^{シテ}から^{シテ}とてみ下向通^{シテ}小袖^{シテ}の砂^{シテ}をかく^{シテ}絶頂^{シテ}の巣^{シテ}
半股^{シテ}の雀巢^{シテ}鳩^{シテ}太^{シテ}りて仔^{シテ}のね山^{シテ}よ^{シテ}水^{シテ}の羽音^{シテ}ハ臆病
に^{シテ}事^{シテ}都^{シテ}の方^{シテ}逃^{シテ}

絶頂^{シテ}の巣^{シテ}頂^{シテ}の池水^{シテ}この^{シテ}う^{シテ}を生^{シテ}ひ^{シテ}三戈圖會云不二山乃
齋江河^{シテ}文^{シテ}う^{シテ}山^{シテ}神曾^{シテ}す^{シテ}不^{シテ}二^{シテ}山^{シテ}詣^{シテ}人^{シテ}と
宿^{シテ}大^{シテ}仰^{シテ}仔^{シテ}のね山^{シテ}

あ^{シテ}人^{シテ}不^{シテ}二^{シテ}靈山^{シテ}故^{シテ}其^{シテ}山^{シテ}の靈廟^{シテ}遙^{シテ}物^{シテ}疾^{シテ}す
烈風^{シテ}如^{シテ}四^{シテ}五^{シテ}丈^{シテ}山^{シテ}と^{シテ}餘^{シテ}列^{シテ}松^{シテ}樹^{シテ}あ^{シテ}不^{シテ}二^{シテ}靈
廟^{シテ}一^{シテ}安^{シテ}松^{シテ}近^{シテ}り^{シテ}と^{シテ}四^{シテ}五^{シテ}丈^{シテ}一^{シテ}安^{シテ}不^{シテ}二^{シテ}靈
廟^{シテ}あ^{シテ}尾羽^{シテ}三^{シテ}脚^{シテ}の^{シテ}根^{シテ}一^{シテ}安^{シテ}不^{シテ}二^{シテ}靈
山^{シテ}集^{シテ}あ^{シテ}人^{シテ}病^{シテ}の仔^{シテ}良^{シテ}わ^{シテ}す^{シテ}モヤ^{シテ}う^{シテ}一つの廟^{シテ}ハ
止^{シテ}あ^{シテ}す^{シテ}か^{シテ}待^{シテ}や^{シテ}と^{シテ}ゆ^{シテ}

三^{シテ}脚^{シテ}の^{シテ}根^{シテ}あ^{シテ}書^{シテ}か^{シテ}ひ^{シテ}あ^{シテ}き^{シテ}ゆ^{シテ}

印良記行 保良村^{シテ}は良^{シテ}崎^{シテ}一里半^{シテ}から^{シテ}三河^{シテ}の地^{シテ}つき

三月伊勢とハ浜を越えて山越えをまひきる坂より一方あると伊勢の名
處より入り入らぬる音山といふ山あるとおもは也南のあの果て音山の所め
て海をまたくことあるとあらわすとありてそぞうありて音山の所め

音山の所めとていふと伊良古寄

平井物語 卷五 九月廿二日之朝、平井の兵たる源氏の陣を元氣せし。
伊豆駿河の人氏石川は軍より逃れて山にかくれあらひて駿河の家
を絶えよからむるといふのみの外の不毛をあらひて源氏の陣
の遠方のまことにゆきゆきと源川より武者をみる。せんとをあきらめ
其れの折り不二の源よりくるみたり水をも何うかくらまくらん一もよ
うと立ちの羽音のいつら大風をもやさずくれば平井の兵ひれあるや
源氏の方のゆゑにハキムセ多利當りやつるやう甲斐をみの源
氏不二の福もしかめもやまくらんまとハ義と屋根川すまゆる

富士の山林の行ふよ

禪定や殊教をあり 雪乃原 文蘿

一月厚不二の福ゆりがゆく 吳雅
二月雪の音林山の山本葉のかげやまを不二の雪の山
内山の音林山の夕顔をまへぬ不二の松ねらう山 雪の山
高林駒のゆづりつる士道ももきりをかく 北枝
三月の雪の不二の木根や山代の春 許六
四月の雪の不二の木根や山代の春 富士り雪
五月の雪の水をゆの布ゆや 不二のゆゑゆ
六月の雪の水をゆの布ゆや 不二のゆゑゆ
七月の雪の水をゆの布ゆや 不二のゆゑゆ
八月の雪の水をゆの布ゆや 不二のゆゑゆ
富士海苔不二死不死日草 富士貴笑 栗柿 松檜の木のゆゑゆ
下越根京越室足柄の里 横はなうの室荒井の渡口佐野の山越海をくぐ
て家をかかる三保清見まつて越へ相根かまくの姿日が西より橋
上くる人の道をめぐる奈良駿河基木をまく車よまかうをまくもく
ハ駿河山をかきくぼくはるあゆのあくろす今 諏訪の湖よりこくよまく

と漫一甲品の肩より二尺を越すて扇の面をえり
むかへ東海道ハ不二足をもつて山の筋を西行其やう様はりのまゝ足
柄清見横きよ景を不二の三里とつるす不二のすくへ重きの累
倍横をくふるは對しよ多矣アリ

いはせんあらゆるをあくべや横をすす人の心を深伸ひ
舟のト通富士の御ゆあり諸相あふの界なり

建武二年十二月廿日新田足利公所と合戦モタ太平記

芝瀬川下流モ不二門を食い川節了海苔を生い不二海苔モ

つみちろ 万葉集

鳥總立あくへりとね本さきりきまわらお本を

我せことを山ゆくやうすまゝ立あくへひの根のあるる

箱根よりと竹相荷とかけハ桓武天皇延暦廿一年癡相模同足柄路、開
舊荷路以不二燒碎石塞路也翌年五月燒苔荷復足柄旧路

音う詩歌連歌のりね合をそつまハ太さ山のよさに比せんあれ

と古今の君よ一首秀く者ハ赤人の白めうすア共余き山と對して万

一もなれ事無富士吉ゆのり一生うどかや東碑よ遊く人をかくちうき不
二の詠よ心力を費一又東碑よかすむふくかみ難き不死と云ひて一升を
降すもよのぬまきよるすア

宗祇法師修焉に 上や山莖はとほ湯よ入て強飯ふよまかくかくん
とおもひ立めといひ宗祇老人あよは西アでかくすをねぞれと今之に
あやまにけれかねハまの人のありもよまくとてもアとてス都
よかアのがんじ物ノシみのよまくとてお齡のかけかアよかと
よかくとくみをあれ付ひそれア不二をも今てよる付ひそれア
トスヘトス

七車云不二の歌り画云ひまう壁すよすまく腰よ首よ雲の今
マテスセやうう共けきよ又曰きよアでわる不二をぞるる
暫時モアはくモや足ふ山をおりひり立つてよしよしよしよしよしよしよ
にあああああれとちよけきよかく

ひよのほうと秋の草すのゆーのゆー

鬼

三月廿日今朝の不二を移修ト
え日アスリのチスム 不ニの山
モテテ富士と天上帝の寺ハ
ないふり富士寺ニシテ 天帝の御
不ニの山寺ノ象印の ありしうち
秋の雪不ニモリロ^{ナラム}トス
不ニモリロ^{ナラム}二月四日
信徳

天野信景、信庵

浜民皆をやくに砂を集て堆をうけ壁を
ひそめ而後てハシメを取てひそめくから砂をつゝみのやう
ナチホリ花 不ニの山モアシヒリムカ又の御使ミキミ
キテハシニサムミの浦なれそもよみこころのあらの浦近ハズ
一ノ不ニの山ノアシヒリのすゑを御すゆに見え一舟をいつのまゝ
あんじと定めざるにてぞもふ人す

万葉よせの海こもくもくは次のすへ日本紀承平七年甲斐國言ス

駿河云不ニ山神火水海を埋むとあハハナツヨ遠シヨリ

万葉一山部宿祢赤人望不ニ山歌一首并經歌

あめづちのりふれ一時也かんびて、多くともも破酒する布士のち嶺
を天の原、かさけるは、りもるひ、かけよがろひる月の、まよ
そえひ、あくゆく、いやきは、うとき、くそ、雪うろり、かくつき
いひつきゆうた、不ニのたうねは

田子の浦のうち出でて、それハキアラヌモ不ニのす根よ雪もくらり
山部氏ハ山部大楯連山部小楯連^{タチナカナ}みてかくねうと連なるを名
称う焉よ駿川赤人ト舍人^{ヤクニ}人^{ヒト}の供^{ハシマ}て詔をうけく
まみ一歌あり後事^{アフタリ}ハ玉をハあじ^ハ班田使^{ハシマ}の附^{ハシマ}ト
百人一首方後

か茂吉御著

田子の浦の浦^{アシマ}おがてアシマハ自め^ハ不ニのす根よ雪もくらり
神名式^{アシマ}原郡山穗の神社あれハ古の海道ハ久のさつみの山
かけつ^{アシマ}（^{アシマ}）^{アシマ}來てさつみの東よ出^{ハシマ}きハ富士山向^{アシマ}

不二の木根の雪あらまよ天かみ
秀くとて、ひにとありて、塵りる。其時其地其情おのづく傳す
古のめいめい赤入り短歌の神うるを。は一首うきる。依然復南山と
ゆるやくとつ人皆ひとかへ甚ありのすせうれ、かくふかけうすかて
スレうるよれひ甚くとて、無邊。と、はまうの心を説せしハ似
くれとれの心。のなげよ、はくあうのゆく。仰すまがさき
頬政よりち意を好みけんとすくちうゆする。一
近い紙やあわへによ物より比良の木根の雪あらまよ
とよやかならト。夷み我哉ひよ祖神のう

唐崎のねうだりあむる。

篇

まおおまけち意をあむど。附頬政の歌。比良の木根の
雪をさむととて、唐崎の松のおりつきを詠めやうむ。み我哉
かよ祖神ゆく赤人の歌の意をぬられ。と、比良の木根の
そよそよれも。頬政はさき成翁。意うてすきの眼あらば通り
す。

西行

袖川某。古東の陣の時不二とよよまんとおひひて、あをこうら
す。すくぬられす。あくまほんと。あそこうて、アソミ
きの日。ひねる根の源雪をむかで。あくま不二の山雪
はくと。一首おひら。あくま不二の件。其まよつみうみの浦え
坐すのうすく。はくらのゆく。よ

万葉三詠。不二山歌一首。安短歌。

ちまのうみの甲斐ふうらよ。び河のふと。ちむちのみかからんと
了不二のうる。岸ら天雲のひやき。ばくうみをとひものかはむよ。ゆゑを
雲もすけら。雪をちむて。けらりひよそひがうけよ。あくま
いの年。神うちせうみと名づけ。あくも其山のつみ。海を不
二河とくらわくも。其山の水のくさち。ちのうのうのうのう。い
さか神うちたつとも。なかよし。すく。絶活。不二の木根うそれと
あくまう。

不二の木根にあくわける。雪とみか月とまよ。けめれ。ハミのあくまう

かくの根をたえがり。天雲もすまく。ほくうなる。あくまう

孝靈天皇富士山山製

あけあきふや山ひかむれあをまくらむつやひる
やくよ雪うづう上うづみまくアモリキモマムカシテ 家庭
よのひのむ根くさめうまう富士の裾ゆかむ白葉定家
源内豈莫毛十三次

くせは重み月をもてあもひて只月をつせの人にあつての僧を
誠にまきくさみ水あるうかあくとほ雲流水のあくと石の臺
ヨタカツヒマレシの月ようむきて庵よからいまくつくりとあく
角よ月よ信されて吟がつまうきか花月よげ鳥よくぬあくとあく
に人を賣するみうれハあくと梅あくとをう中無り詩人とすれ
くも傳ひきとくもあきとくもあくとあくと風月よとめくと
くも傳ひきとくもあきとくもあくとあくと風月よとめくと
くも傳ひきとくもあきとくもあくとあくと風月よとめくと
くも傳ひきとくもあきとくもあくとあくと風月よとめくと

石川丈山詩

青天忽見素羅笠 罗笠擔冲十九列

雪如純素煙如炳

白扇倒懸東海天

白扇倒懸東海天といふりつねはいづまく者しても
にまくらむ地でうづけ旦雪立かゆひて山の雪吸う
スリマレシと要うすまといそんじ落ちかうとて
あく雪の西よかくとや尊賀不二 共角
五月面や不二のうすのち後は
笠あくと不二のうすのうれひ笠
一尾根うづく雪うす土う雪
お扇の扇うすうれひうれひ
笛土う常雪うす面や おつ毛 龟翁
不二の筆あくとうづく
水う月のなまくわくとせむる土の雪 檜葉
笛土う常雪うすうれひうれひ
笛音や室あくとうすを不二面 共角
うそや

えくま雪やうすをうす

東坡

草庵集

雪入日大雪とあつて
東風吹き仰天す
かくはるかに北風吹き

因みの浦もまたあるうち東風よりまく不二の雪を

一人へす追つき

共作集

城上ちのとおむけ晴れ風雲のかくと
一月雪とかやひそむ空晴れ雲う
よきくわくああくう者あくし者か
翁我つふ風雲を一月雪とかやひそむ風雲のま
うくわくはいゆきをすらりゆく

湖水ノ賊

李子由

近江國瀬戸海を大官に近きにて近江よつゝ遠きと遠江と号
すくら仁皇十二代景行の御宇志賀の郡より都みて高穴穗宮に行幸す

三十九代天智帝大津の宮にて廃帝の御宇保良の都もくろ

書紀 三景行天皇四年二月奉美濃一文、十一月自美濃還則

更都於卷向是謂一日代宮

月五十八年春二月近江よめ志賀よ三とせすまへたりか
かの宮とくよ六十日十月天皇高穴穗宮に崩す

天智天皇六年飛鳥岡本宮より近江大津宮みせぬ十年十二月

山内年五月大海人大友二皇子乃ひ軍みそよ平らき大海上人

皇孫命立御室の清川の宮か天下知らず近江の宮から天皇よる
の廢帝ハ召位の後年号を立ひあの年号を用天平寶字五年

都を近江の保良みそす

近江をトメハ十三郡保疆潤汎種千倍を得春氣よやくさう日が四度大
上之風と称す仁皇七代孝靈五年地裂て湖とす同时富士山現すされハ

不二禪定すまに近ひ人を先達と定む善積
破つて一村城古郡公まで故田の新郡に屬り曰く奈良郡ヨリゴツノシ也湖アシハシ大さ
三里ミツリ日本湖ニホンコと称す。その琵琶湖のりん形似シムカヒいはとせんの志賀
志賀ハ近い玉志賀郡也南を奈田の川カナタよりから比良山のわざ
ウカク志賀の古里トモヒハ天智天皇太祖の宮の跡アラシ成務
天皇も高穴穗タカヌシの宮ミササギをもしくさき穴穗タカヌシを今も穴ち村アラシ
京より山中越アマガヤて近いの故ハシナヘから通す

万葉三

破の寄シキみゆけハ近いの海アマハナのまきに因詠アマ

志賀の志賀のあゆりアマむかのくのよめらんやも

破のふ浦アマの浦アマ浦アマあれる都アメハカ

温故日録

四月初ノ午日

今度ま近い玉湖の東の渡辺の町妻アマと名石の南十石町アマにて飯田の

庄

あいは村の神アマの祭アマ其村の女アマと我アマ男アマ夫アマ娘アマと土端アマと

板アマとくさくしていそまく祭アマの場アマをりて人男アマの事アマをかくは思アマ

神靈アマをかくすとアマや是則漏障アマえんげせアマりりすアマ神アマの方使アマ

あらにむか

姫アマあうアマの男アマをせうアマとくとくたまる場アマひとつ

ひとつて男アマのおやとアマをつうて大場アマひすにて人目アマをかくせ

うアマ神アマよそむきてうそアマハまくのふ場アマうつれもてぬるりアマ

がんやうよアマ常アマの鍋アマとくとくてりうアマ近代アマはうらうれした

えくアマ神アマよそむくアマとくかの西アマへうちゅうアマとくううアマ

つアマとくアマ 伊勢アマのかアマ

あづみアマつアマまの祭アマとくせうアマ人の場アマねん

清輔集

おとくに御アマのまことにまづまのまのまアマおとくアマおとくアマ

おとくアマまづまの神アマハアマあアマおとくアマおとくアマハ

後序選集

おとくアマつアマまの神アマハアマあアマおとくアマおとくアマハ

おとくアマまづまの神アマハアマあアマおとくアマおとくアマハ

いはせんつまみの神をうながすとみへくべの御みの音を
佐々波實^{ミクニ}とハ風土記^{ミコトキ}云て樂く波や丹後^{タチホ}の文まハ万葉^{ミツバチ}はまゆ
東西十里南北二十余里山谷のあらむ處八石ハ川湖をかこむ水郷五百余村中
大小の島あり竹生島^{ヒタル}ハ周廻一里寺院九坊天女をあつめて岩つるぎの神子
あり室浦^{ヒル}の秘密^{ヒミツ}を討^{ハシメテ}一經改^{ハシメテ}の機^{ハシメテ}をひく

神社考^{カウ}竹生島^{ヒタル}に品湖^{ヒカル}のゆあり其岩石の内水晶宝珠^{ヒカル}一本
朝五奇異^{キイ}の一つ也傳曰孝靈四年江筋地^{カワヒ}にて湖水^{ヒル}を以て爲^ス景
行天皇十年湖中竹生島^{ヒタル}聖武天皇天平三年竹生島^{ヒタル}の神現形外
三月三日竹生島^{ヒタル}の水深^{ミツタマ}水深^{ミツタマ}八十九尺其^{ミツタマ}五十五町二十三丈九
尺^{ミツタマ}とちいさきゆありれきづくをかの室浦是^{ヒカル}をげむ

竹生島社^{ヒカル}素戔鳴尊^{ヒムカノミコト}の御宇賀^{ヒカル}以魂令^{ヒカル}社^{ヒカル}

寺^{ヒカル}波井郡^{ヒカル}湖中^{ヒカル}あらゆるのめぐら^{ヒカル}魂^{ヒカル}を以て斗^{ヒカル}前^{ヒカル}一町^{ヒカル}あらゆる^{ヒカル}ハ
一里水底^{ヒカル}深^{ヒカル}南^{ヒカル}八十尋東西^{ヒカル}十尋余東^{ヒカル}の岩下^{ヒカル}に東西^{ヒカル}延^{ヒカル}穴^{ヒカル}
水^{ヒカル}かく^{ヒカル}流^{ヒカル}穴^{ヒカル}のゆ^{ヒカル}御^{ヒカル}奈^{ヒカル}あら^{ヒカル}西^{ヒカル}五十番^{ヒカル}れ所^{ヒカル}
絶^{ヒカル}改^{ヒカル}の機^{ヒカル}をひく

治承四年本^{ヒカル}仲兵^{ヒカル}をわ^{ヒカル}とあら^{ヒカル}財平氏^{ヒカル}

一額これ而^{ヒカル}但^{ヒカル}手^{ヒカル}候政^{ヒカル}や^{ヒカル}不^{ヒカル}の^{ヒカル}お^{ヒカル}一^{ヒカル}生^{ヒカル}事^{ヒカル}訪^{ヒカル}て^{ヒカル}難^{ヒカル}道^{ヒカル}を^{ヒカル}
ク^{ヒカル}白城^{ヒカル}次^{ヒカル}り^{ヒカル}あり^{ヒカル}アリ^{ヒカル}
武島^{ヒカル}久^{ヒカル}生^{ヒカル}の^{ヒカル}あよ^{ヒカル}の^{ヒカル}神^{ヒカル}の^{ヒカル}峰^{ヒカル}峰^{ヒカル}は^{ヒカル}山^{ヒカル}と^{ヒカル}ある^{ヒカル}海^{ヒカル}人^{ヒカル}に^{ヒカル}すめ^{ヒカル}白^{ヒカル}石^{ヒカル}
と^{ヒカル}四^{ヒカル}石^{ヒカル}湖^{ヒカル}上^{ヒカル}時^{ヒカル}樹木^{ヒカル}一^{ヒカル}株^{ヒカル}奥^{ヒカル}の^{ヒカル}山^{ヒカル}人^{ヒカル}數百^{ヒカル}表^{ヒカル}を^{ヒカル}見^{ヒカル}く^{ヒカル}
猪^{ヒカル}寄^{ヒカル}国^{ヒカル}山^{ヒカル}里^{ヒカル}は^{ヒカル}鷦^{ヒカル}鷯^{ヒカル}ハ^{ヒカル}水^{ヒカル}の^{ヒカル}巣^{ヒカル}つ^{ヒカル}勢^{ヒカル}四^{ヒカル}位^{ヒカル}中^{ヒカル}蛇^{ヒカル}柳^{ヒカル}アリ^{ヒカル}入^{ヒカル}龜^{ヒカル}
の^{ヒカル}二^{ヒカル}峰^{ヒカル}廣^{ヒカル}の^{ヒカル}中^{ヒカル}に^{ヒカル}海^{ヒカル}山^{ヒカル}比良^{ヒカル}四^{ヒカル}明^{ヒカル}の^{ヒカル}み^{ヒカル}を^{ヒカル}鏡^{ヒカル}伊吹^{ヒカル}の^{ヒカル}影^{ヒカル}
を^{ヒカル}す^{ヒカル}ね^{ヒカル}勢^{ヒカル}四^{ヒカル}青^{ヒカル}柳^{ヒカル}の^{ヒカル}

湖^{ヒカル}を^{ヒカル}入^{ヒカル}の^{ヒカル}所^{ヒカル}は^{ヒカル}ま^{ヒカル}故^{ヒカル}あ^{ヒカル}ま^{ヒカル}い^{ヒカル}り^{ヒカル}く^{ヒカル}の^{ヒカル}水^{ヒカル}

采^{ヒカル}り^{ヒカル}え^{ヒカル}也^{ヒカル}

さみ^{ヒカル}れ^{ヒカル}よ^{ヒカル}皆^{ヒカル}い^{ヒカル}き^{ヒカル}采^{ヒカル}を^{ヒカル}ア^{ヒカル}レ^{ヒカル}ん

み

山^{ヒカル}は^{ヒカル}良^{ヒカル}四^{ヒカル}明^{ヒカル}の^{ヒカル}み^{ヒカル}と^{ヒカル}
神名式近江^{ヒカル}志^{ヒカル}賀^{ヒカル}郡^{ヒカル}日^{ヒカル}吉^{ヒカル}、神社三代實錄貞觀元年正月近江^{ヒカル}
徒^{ヒカル}二位^{ヒカル}熟^{ヒカル}一等^{ヒカル}比^{ヒカル}神^{ヒカル}按^{ヒカル}正^{ヒカル}二位^{ヒカル}、小右衛^{ヒカル}少^{ヒカル}右^{ヒカル}親^{ヒカル}ひ元^{ヒカル}の^{ヒカル}心^{ヒカル}ひ^{ヒカル}
拾^{ヒカル}遺^{ヒカル}集^{ヒカル}修^{ヒカル}都^{ヒカル}實^{ヒカル}用^{ヒカル}日^{ヒカル}枝^{ヒカル}の^{ヒカル}社^{ヒカル}と^{ヒカル}作^{ヒカル}

ね^{ヒカル}く^{ヒカル}る^{ヒカル}日^{ヒカル}枝^{ヒカル}の^{ヒカル}社^{ヒカル}の^{ヒカル}や^{ヒカル}す^{ヒカル}章^{ヒカル}の^{ヒカル}か^{ヒカル}そ^{ヒカル}言^{ヒカル}や^{ヒカル}め^{ヒカル}き^{ヒカル}

御後せよハ比歟ヒエシトハ延暦寺の事ヒエ日吉をハひよーとすむと
かすひ別ヒキム。かくきもと日吉とかく比歟ヒエシトひよーとつるみミタムス
キ。佐吉サキモチハますのじよすかとくらまちのり。同ヒテりん最澄
山サンを佛寺ボクジニ達タマて。神カミト。具ツクシのやう。神カミのやく。山王サンウト。山王サンウヤ也。
貞ツヨセ奉タマうれ。今イマのせよ。ソウトハ其ヒエ日吉ヒエト。山王サンウヤ也。

陰德太平記

承平八年十二月廿五日雪ヒエいとをかう。降ハリ。かう。且アシよると。こう
あらハ古アラ。す。ある。よ。付ハシ。ハ。嵯峨カワハシ。方カタ。おもろ。に。晦カニ。き。ま
く。さ。あ。る。西芳ニシハラの佳境カニヨウ。に。目メ。と。よ。う。め。ら。う。に。比歟ヒエシ。う。ま
方カタ。を。か。ま。上アベ。ん。や。そ。物モノ。ま。き。ひ。体コト。の。不ハナ。二。の。事モノ。か。平ハラ。と
お。ゆ。く。

太内 義真

かく牛ウシを。き。東ヒタチ。不ハナ。二。の。事モノ。を。全ゼン。都ツ。の。雪ヒエ。の。仰ハタフ。

ヒ歌 天竺ヒマラヤ。よ。ひ。づ。れ。と。天ヒムカ。御製

雪ヒエヌア。レ。シ。キ。富。士。の。名。立。ヒ。景。の。代。の。甚。希。雪。の。上。平。山。

山門サンモン。傳曰。堅カタマリの三點。木。根。三。根。二。の。源。理。ひ。く。ス。

意ヒ。堅カタマリ。室ヒ也。上下ヒ。中ヒ。空ヒ。又。上ヒ。室ヒ。下ヒ。又。室ヒ也。根ヒ。併ヒ也。八方ヒ參
一ヒ。而。方。法。有。故。故。空。三。點。故。堅。三。點。故。室。中。也。底
に。有。そ。あ。り。故。故。根。一。點。故。中。也。中。也。根。一。點。故。中。也。底
點。故。三。點。故。所。謂。室。根。中。也。三。點。故。中。也。中。也。根。二
に。堅。一。點。故。中。也。中。也。中。也。中。也。中。也。中。也。故。故
根。一。點。中。王。の。堅。一。點。中。也。中。道。故。猶。空。猶。假。是。則。神。之
名。也。三。諱。佛。法。之。神。佛。名。理。一。統。而。無。二。點。
延暦寺。根本。中堂。延暦。年。中。傳教。大師。建立。其。外。三。塔。乃。ひ
模。川。飯。室。惠。勤。寺。セ。く。の。僧。の。造。立。す。

四明山。嶽。比。歟。の。絕。頂。也。山。王。社。ノ。つ。し。ハ。十。町。平。花。ツ。の。社。ア。ミ。ス。ト
傳教。大。師。の。山。王。社。ノ。つ。し。ハ。十。町。平。花。ツ。の。社。ア。ミ。ス。ト。ゆ。り。付。ツ。の。ハ。女。人。と。ゆ。り。
一。て。山。社。近。詣。す。も。く。四。明。く。け。中。堂。ア。ヒ。丁。の。か。る。事。大。岩。ニ。フ。石。佛。十
併。牛。ア。村。木。ノ。根。セ。ア。ヒ。事。四。方。以。る。然。ハ。四。川。の。あ。り。
む。か。一。比。歟。山。と。三。井。も。と。不。知。す。ア。リ。財。ア。傳。三。井。ち。と。あ。さ。く。

在。九。寺。見。北。兵。左。

とつひやくわハ

山譜 東 東 東

と對せしへばニウヒ御寺トウラ三井寺ヘカヒヤサヒ、比丘尼云
字をあやまつてす。うづは故なり。下山なまくとさむり
女入さんせいかく比丘尼を寺モアシムトシマリ山うは歎らう。東
東來ニシモ三事き御寺モアシムハメテ。よアヤマシトツアミエ
サムタモニ。三五の村うちけ村のトヒミ道品のあやまつて
首まうひおきにつよく我傳豆人あくまく我傳豆人モ
文傳豆人トシル

鏡山から蒲生郡かく多病のちのつる古御手

伊吹山ハ近江美濃の境より西ハ近江坂田郡東ハミの不破郡

神名帳 伴支改神社

ちゆれ りを武するのちまくは山の神ク室キニムシムモ
かれどあゆくのちまく山の神よもき猪ちく共ちきさ牛
のめくさきかれどあけくのちまく猪よもきの共神

のつひよまとあめ今をぬまかづてん時めとととのつひひてつひ
すきえよ大水雨とナリて日が昇るをうちとりぎる

里田十方放報

至月の始長たまをやよりニ三まいざめておき里田の浦みちひ其日
申の附又何某茂多成秀とつよ人のじろよいの解説狂言月ナ
うかげてあひと声くよすゆふ生ぬりひみれかとろきすれを毛なけ
塵を拂ふ箇中ヌ芋あくまくけあく繩射の切目たまふをいと無なけ
れと音よ延をのべて裏をりのに月を待てとくまく出湖上花
やうにててのひひと仲の秋のゆう日の月陰は堂ふくゆを鏡
山とひくや今もと於其あく遠ゆと彼堂上の様テフニモ
三上水屋の丘南ゆもと其なりてありとくまもとまとまと
いふやくに月三竿可で黒雲のすまかすいづれく鏡山とつるをうけ毛
曰おく雲のかくも音をもてなりひそむうやく月雲外のすまひて
金鳳銀波千仲佛のまうと映のうかく多く月のぞきのとくと京
極まつての歎息の韻とまう十方の空を世のやまかけて多端の韻をた

よきとまくは堂みせひてこそかのれか惠心傳部のまどもる日ひうれと
りへあすスレテ身はすてあれど音をうこ無きてはさんやと
宿はよまきをあけて月ハ横川より人よす

鏡附て月さへ入よ海に堂

房

鏡附て月さへ入よ海に堂

房

かくて三重の舟よおて湖水の身よおきほんと物このむ人の心情を説
くにねよ紙の唐手をなげれと扇よ葉絨のあめ男あめ赤壁の
歌のと夜一さるあさきめうさく波やすむの波のあめあふ鏡の山
ふこなまよすく白の比歎を横川のわよつまうては良のす根
は厚そよかまつるりうちよ音羽のあめく石の鐘ら栗
はの音よさてそこよ根柳の霜よあめん矢舟のぬれきう
音をかれてちりよ仰るーー

身りや波水すくくとせみけ、身

修る栗の身す身つすまうたる人やよめをよそをよめ

身つすまうすのうつせんやさきんもくや

四十日計班をしやひつとよみよ 路色のあ 牧童
身の船の音水をよみよ 魚めや 比肩う ゆち雪ケイホ ま由
身の山の平舟をつまや 一めんすけす 売田の船
門前屋へ船身す 修國うよまめ自舟 ひ 船六
高柳へ船身す 湖や わけくと 四方の花 小舟 乙列
十の舟をす るくや 通じとまく いのね 素挽
船つまや あくくとす りの身
比處のくのうのうく

思傷のうくのうの身 や い ま す 邦明

松を唐崎千のね蓮ハま耶ス身まく草葉ら四川又肥う柳大根
兵全麁ハ幡杖を長漫結高宮布野例さり高鳴硯武佐墨
白部石取木找木庭石ハ木戸よもく盆山の森砂ハ大洞の白石
是方解石ナキ伊吹の産ハ蒿麦がみ艾石灰葉種の類すむ岩本日野
挽う會津の根かうき燒う高麗の藝う保元丹百々葉播磨
田禾醒う井聲多賀村子繩村鎧四十九張のきせる池の川の砲針守

山蜘蛛小友鉄炮

志賀のかくさきのねうさらつるお風よまうにてかくす跡れあくすを
大体の内城にて村丘踏面の手前の方松庵東玉難齋直壽とて
二人あるしき松のすづれくわくおひいす君の難秋つひは
時ある松を手のひて掉り天正十九年の秋のうなづきけよ尊朝
法親王のせりゆかの松の記みええて扶桑拾葉集のせりゆ
もう今のおは是かう

幸峰のねうさらよくかくろくめく 痴
かくすよの納豆の日取れ ゆね

志那々蓮の名をすゝ栗ち郡矢擣山倉山田ま那と並て湖アレ
四川兵生八幡長瀬おの名立庄物を解み乃の人のあくあく
伊吹山大平寺ハ葛木の名を大根スリかくみとづくは是かう
百々葉ハ彦根家中百々市亥亥傳安産の城葉子とく甚かう
四十九院村越智川と高宮のすらすきせるを高めあがめ

佑一木家譜弘治元年五月二十日有唐人名ヲ曰ニ長子ロ一嘗甘テ
自南蠻渡海到琉球尋日本多祿島教鉄炮術先月
入洛見將軍家而傳其術便長子口預佑一木上今日未著
江州同廿八日居近江北木友村賜百貫領地

多賀ハ近江木大上郡多賀の神社大社リト町落多子を賣

古く紀伊伊那改大神候海ノ多賀はすまのむか

内や子ヨ多賀大社飯盛木山約子ハ悉く昔時垂仁帝の御墓伊
那諸尊當田山社十八町東方山中木是を製して飯を
廢る調多よ用れハ萬の毒を除きて長壽を保つと記宣よせら
れちぢれ勅令下さうの山より入此樹をもとめ神勅の如く是を剥表し
剥りて敵軍斜木の則は林を飯盛山と勅号と賜り今連
路にて年く十月初子の日よりは樹木と剝表右側のやく元日示
上一樹一株の御みの製造の事あるハ往古の形ナリ西よりつ
毒をのそき長寿を保つ神祕の良材四記みえりくうと
ほくすく

武佐別の八合件 是笨田勝家之製 端無のデバシ修本家、是足唐也其子孫、大津るハ
か締戎あを起り かまつての生食よりとばるよりもく 潟中の猿師ハ尾
上行山ニ締吉と云き石垣突ハ阿野人を天下み用の白鷺の山神也七矣
リ芦原をそなむひ孤寄の山神也日が武内山神也多加久奈古の神社ハ
ちゆうぐれす(さくら)

元強山風土記云往古大原の音つらずすけ而故より良材多めて是る
駿一あり甚あきるあらぬ一より玉を施設の事とひ
通年慶多變化をひりかまづりのつる
まちもの里とおきて長木寺のまち同念ある外要あるハ武佐也
著せ集大原の西の山の粟田口の大通を通りて道あ
くしてあらわらとよむを御座法事のいみる
まちの山とおきて長木寺のまちあけとやつのまん
大原の名ハ天皇天皇の都とひはく是とゆほとゆけ里も
坂本の城は地門り附町あるとすよりを北所の音は中の内をもす
室とくらべはゆる大原のおつしをれ乃てくもる

秋のよろこびのこのねまくハ大原の里のかまくらく 仰あ
大原寺乃のまくはめハ何 佛 猛
あくまくにちゆく車 やくよそく か戎
彦子食ハ持ゆ村よりもくをかあまへく也木四郎宇医門の先陳
をちて川をくまく る也

尾上行山ああくもは奥の源氏住居せく今よみ源傳て御水の多を貢き
すと近いの源五郎尉、室町家の時錦織源五郎とつゆの湖水の漁獲を
司りて毎朝たまする鮑を京都へ運せりとうげああ

白鬚神り志賀郡うちかうすあり

日吉上七社 大宮 聖真子二の宮 八王子 客神宮 十禪師 三の宮
國中七社 牛の尊 大行夏 早尾 多比下八王子 王子宮 聖女
同 下七社 悪王子 新行夏 岩髓 聖真子 寶瓶 銀宮 大宮 寶瓶 二宮 寶瓶
下字集三井め日枝山のよみ日枝山よりヤリ其松よりのひよ日枝山と
みのちひり比叡山山門日記より山門鎮護玉あの道場天子が
令の靈城(レイジ)山を以て敵聖のをみよ比て比叡山也

白川院の出前よりちんむり仰せられものへ加茂川の水又六の寒山法師
天保乙酉申年六月从戎京都へのより御ゆきは年春より雨天候にて水
害の甚甚あつて中仙道の川く洪水にて野原川とよびれハ湖上を如き
大は近づくとやすの三里斗立と福地とては漁村あり、近づくと水す
いもさす大きき湖水供水平一丈余もまた水邊をまぐるハ民
あを廻り田畠を損す八百八十戸入て諸口ハ漁田一ヶ所ハ水底近く湖をが
む水鄉さんきよ乃と福地と彦根の城をくじい兵主大明神の社ある丘とがふ
よさか社え兵主等とくじいの名産すくと大きく嘗ひまつてやうう福
地と大は近湖上十里のみより便かれて大はりく湖水濱よにひで
村に香水と羅衣と水晶の如くひや、すすみ、水とがくかへ用意あるあまの
湖上を五里斗漕か湖のまやかとありあまに濁水の中を一助矢の町と屬す
水あり清き香水に用ひ近村皆もよしとくとく香水を汲みとつる
桶せりハツメ汲みて香水に用ひ近村皆もよしとくとく香水を汲みとつる
中内とて茶をまことに味ひからく水桶を属すて一心助の川とがくか
えよ常にかけ水あやとてよか人多そつて常に湖の水湧きゆけ水と

向ヶれハカニヤアヤキムのれ業セタ余ヨリハ今度三十の年以あかくの
如き太水の時山水筋とアマト、まゝく風ハカニのとくの洪水あくとあく
小の當の河水也アドロク傳てよけ水肺作生修つりうる石壳え
ちて宇治橋の三の河の水脈也アドロクとくとく我朝アマ豊太閽伏見に在城の
附宇治橋の三の河の水を汲め渠の陽と日ひの下にひだるけ也あくよ
初づくよろ十常の河へ水脈もくらすよとアマ又奇くは年五
穀よくは矣万入羅衣ヨウム諸事もくらすよとくと木の價玉と紙もか
に旅行して乃羅衣ヨウムアマスから奇くは運すよとアマは近いの
賤を詐す、ちかくもよかくて同一心のあくよしむ

白氏文集 錢塘湖ノ石ノ記

湖中又有泉數十眼一湖耗則泉湧雖盡竭湖水而泉用右餘
は文从哉、石く水脉のもくとくがくとく

筑の神り錦の御もくとく社の神氏の大將の威を益くとくとく四の
宮の神社今度の八幡と豊満の神ハ幡竿を守り宗賀の神明と古座の近坐す
彦根山の天神ハ安津彦根尊と奉り金徳の神うれ、金龜山と云ふと云ふ

すむ平田山鳴宮の天神ハ旅所之流天神ト天津彦根令也木徳の神子て千
の村多々官房の多々神代より河内太白信貞信賤音の歌モ彦根山とある也
山上の觀世音坊川の山宇寛弘三年白川の上皇の地あり神社佛塔金
龜山乃城の為より地をうつて今のか野寺み同坐あり

我度内神う長等山園城寺のゆめ天智天武地統三代の天子の御
生湯みしづの泉をすくよろて井もとづのら三井に改源の
賴良の長男と八幡のゆきよして八幡太郎義高ア次とか義のゆ民モ
か義の治即キ三男を止神の民モして秋吉と御發光モ源氏の左將
より威をすりとひき是る

大津四の宮の神を詔つありまことに額に天孫乎四宮

彦根山ハ中右丸

寛治三年十二月十五日攝政殿令參詣近江国彦根寺給
廿二日太上白主令參御彦根一給フモ元今之京中の上下多くけす
ま信す觀音乃靈験也 太上皇ハ白川の上皇

大納言信貞音歌ま本集

近ひ彦根といふあゝ觀音の發而そりみりありに右大寺
みちくよさりれまほくと兵のめのとにひやく

彦根ち善きつとせりと八室の雲井又ましめぐ 改信
よとしての彦根の山のねりハ心晴てあらかづ
兵れ子

方玉三 あらす都え麻まく息長のをちの小草の
息長の宿祢の皇子ハ息長モシ此の今神功皇后の内大臣ト高額
秋原玉天の日原の末但馬日方といふ人の女モ神功皇后の母モ
今龜山の城の為より地をうつて

井伊侯慶長の役にひかれて石田う領主を井伊あはみ佐和山の城を廢て
彦根を祀へて金龜山の地は城をきつて今彦根の城是也今す大徳彦
根の門のうへはひを拂ひて拂ひてあく化和山を后山のりしかるよ
石山う觀音通場石う白瑪瑙山うを今す・皇朝金山のゆニ井ち
園城ち鐘と名すくむうすぐの山うよめりま山といへハ延慶うよめり
すうちくハ園城もとさくよナ押レ 錦城也

石光山石山寺如意輪觀音頂礼十三番
禮所尼基良辨僧正

天平勝室六年草創 本堂の内 原氏の写あり
河内抄云 西宮をちて安和二年大宰府の附よた近せられひく
式部かまきりのうれ奉りひるけ比大妙院より上東の院へゆき
草命や修るとすのさせひくにひそ不承取やうの物語うめるれんにあら
く作生てますへます式部み作られれハ石山寺よ西おへてゆると行
やるがも八月五日月の月湖水うそてはのまゆりくまに物語の風情
もよしむかひるをすらぬ先よとて佛おほみる大殿の御室をす
はやくそくを源テ以石のあををかけめく是よも源六の差す
えりからすむおうぐくとおひひゆくと
儀同三司母石山延行

石山に十日半とかひまちひひとあまひるくとつあひ半の入るをせ
心一つひかるひまてゆくらんとあひかに生はりてか成川の江と斗をくまいか
てゆきづんがりあむもしくもあめの月をあかんとあひす
中暑實ふらえてお出の際よあまかくさづくは先立人形
ひきやうけうすのむかづくひまくはなづくを出でゆきに

心地どもひくよくつみく物をすりぬたひく中のをくりう
寺のまよつまめ陽ひのたのとあまくさりんはいきくらぬ心地せんがく
あひくきくじくじくまんひてなまくねるをて陽ひとあひて内室
にのわくのあくまに佛よやうてゆくむせらすまつらひやくねおも
あくい外のとてんのれハ堂とまきてとくとくとくとくとくとくとく
おひくとくとくかくさりの月おうけてとくとくとくとくとくとくとく
にあひくとくとくかくさりの月おうけてとくとくとくとくとくとくとく
様よがくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく
あやかとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

猪 崎 檀 鬼 之 圖

奥の海ハ彦根より西南
七里もありは海の内猪崎
ちよふ不動るあり
六月移り
掉ふあり
び図の如く

仲の海

素 室 美 集



故中西教寺ハ天台淨土の一ずつは塙山の浮出堂ハ惠心僧都の千体佛
長念まは頗れのれより是猪崎の不動・掉龕の術より多き矣取の地
名木のすゝめ地龜石塔寺ミハ天台工阿^{アイク}王の塔をとづけ是所謂八万四千塔ノ一也
平流山ハ行基四十九院を建て都^{トウ}率の内院をそんす

湖水傳ニオロス共下^{カクシ}ノ名化ス今ノ龜神山蛇石是也

女人のうかがひるみもく番場の辻堂一仲時己下の通吉般如是止^{スル}畜生の頼文子

かくねぐ

浮出堂志賀郡堅田より惠心僧都の化現右化佛一千件をあれ
より年出堂額大なる^モ獨院詔を下して能く臺山奇跡なり

今の中堂五萬^{イリ}又^{アフ}ムニ其法會を以て、其名をりゆふむ

七月十九日^モ此日のうる法會す

西行撰集抄^モむかし横川に惠心僧都と云ひひくの聲者^{シキテ}う
りう行どくすばり蓮鏡^{ラジンセイ}のつまうて法の意^イとすをやどくのく人をう
あらの神を月のさくが天の社^{アメノカミ}おほきむかすりうらむ

ミクサクヘ侍りれハ汝おか西あく^モくわくに時る俄よまたとう

七月十九日^モ此日のうる法會す

ありしをむく月の光も雲^{クモ}もなくすありとも晴ゆく空のすゑの里人ハ
月を拾ふんと見え侍り松や^{マツヤ}草乃^{シロ}高のやどううけいんとむ
て何^モとあらすむにつけま^クせの足^モとま^ムのあすとれてかく^ミ
カク^ミかく^ミ戸の内^{ドウ}とす侍^ムけよ^ムきよ^ム声^{ヨシカミ}

つねきせきく^ムくもくもく

ときくは僧都^{ソウズ}ぞく

月花つきまく^ムをくもくもく

とつゆきあはれははゆかく^ムくもくもくあゆゆす声^{ヨシカミ}あくま

恵心^{ケイシン}もく奉^ムま^クせでありふす よ考

いたまくひのけをかう比良^{ヒラ}伴^フ吹^ム 泊^ム村^ム

石^{イシ}の石^{イシ}もくもくもくもくおもて

「もくもくもくもくもくもくもくもくもくもくもくもくもくもくもくもく

猪崎不動尊ハ掉龕^{タカハ}の術^{ハテ}名^メニ^ム 每年六月朔日掉龕

奥の島^{シマ}立^チ根^チよ^ク西南十里湖上^モおりは鷺^{サギ}の内猪崎の猪崎寺

に不動尊^ハまく掉龕^{タカハ}と^ハ庚^{シナニ}五丈余の大岩^{アカマツ}あり岩上^{アカマツ}大帆

柱を水上へさへ立てば軒柱を掉とひき又ちまうる柱よりまき鉢を付
くと即ち時もありければ掉の上より舟の者水やへて入るの處をみて
是を棹船とづかる

石塔寺ハ吉朝五奇里の一也竹生島東大寺金峯山金剛峯寺石塔寺
蒲生より二里余りて石塔もあり石塔村とつむ其村の内石垣有る
不ふむか九輪を石垣根方の數皆石塔のそりより石塔もハ石禮
石階也しく石塔のをもていとみむ石の大塔あり土民云祝字
入滅一百年の後天皇月氏云阿音王八万四千の宝塔をつくり十方
世界へ投う其一基もよ止といふ千年を越する物と見え

源平密裏記

大江の定とて出立て寂性とて其源唐士よりうせつまう山とありて、
寺傍角池をめぐるをあら寂性其ゆゑと存す、僧養つて者佛生小
の阿音王八万四千基の塔をつくり十方（ねりひじに日を分）別石塔
ちに一基ともうなづけ自抜業也、いつれハ石塔もるに罪をは池も
アのうねテ彼塔をあせんう焉よけ池をめぐるをもす

番場辻堂八葉山蓮花寺
元弘之年五月九日北条義時守仲時已下四百人京六傳
の合戦より負て死焉りて自害す
當寺に正去帳あり

執筆 稽谷十郎記

百濟寺の下至柔ハ小野道風の真蹟（レンセキ）池寺の八天の餘（ハ）金四ヶ手也正樂（ハ）
佐木本道風（サムラカミツク）菩提所ニシテハイハ狂言白藏主の寺也
道風行海（ハ）李頭小野道風正四位下參議（サニキミネキ）奉守（タサキ）孫大寧（タサキ）大貳（カツヲ）葛絃（カツヲ）
男也 三戈圖會（ミコトノカミ）金固（カミツク）繪馬（エマ）出で野草（ノシロ）とくみととのせく
江源氏（エイセンジ）佐木本近江守（タケミヒタチノミコト）源方（ヨシハタチ）河内守（カワチノミコト）佐木守（サモキノミコト）其子ニ
郎義秀（ヨシヒコ）義朝（ヨシタケ）に仕て印々（イニイニ）義秀（ヨシヒコ）子（タガ）ミ嫁（タガミハタチ）太郎左衛門定綱（タケミハタチ）二男（ニ
弟）中（カツ）法橋（ハタケ）源秀定綱（ヨシヒコタケミハタチ）に子（タガ）有（タガミハタチ）其弟（タガミハタチ）義秀（ヨシヒコ）四男（ヨシヒコ）高綱（タケミハタチ）男（カツ）隱岐守（タカミハタチ）義清（ヨシヒコ）六男（ヨシヒコ）吉田（ヨシタチ）
方（カツ）属（タガミハタチ）名（タガミハタチ）強（タガミハタチ）其弟（タガミハタチ）義秀（ヨシヒコ）四男（ヨシヒコ）也（タカミハタチ）守信（タケミハタチ）綱（タケミハタチ）義秀（ヨシヒコ）之（タガミハタチ）子（タガ）京
家（カタニ）六角（タカミハタチ）京極（タカミハタチ）大京（タカミハタチ）京極（タカミハタチ）其不忠（タガミハタチ）六角（タカミハタチ）京極（タカミハタチ）之（タガミハタチ）子（タガ）京
家（カタニ）京極（タカミハタチ）京極（タカミハタチ）信（タカミハタチ）其子（タガ）満氏（タカミハタチ）其子（タガ）宗信（タカミハタチ）

其子佐渡劉房字氏法名道基也

百瀬守ハ愛智郡觀音山のふくと也 豊襄紀

山門前に本宮一坐せしと義仲さへ都追くせめよアトモ敵方の
正村を立て今城より故賀山を右よりのみ山をふ築う敵と打まえ
月河原を走廻り大橋の村八幡の里湖上をうて見りて平方あざくまづく
すの浦くとあれハ十石のね重もひきだらみ出でるを陣り近に雪ニ
上山の築野例つ川原下陳とらる軍兵車くあくあくみちくさりある
うれりて至るのやどるのま個そとく浦生の傳と取て日暮を色とて兵六艘余
ううれい使をとる海くつうてをせんとせんとせんとせんとせん
本を送る事ある其志をかかて當寺の油料にてお立ち五石をきまんせり

うんくひうみの雨乃 ろも 狐 雪

泉涌堤め林寺の塔頭耕雲庵に白藏主と云ふあり又鎮守の橘荷の社
の邊、三足の野狐の白藏主是をもとて並育に常に脚下あり隨仕す
よき侍童のゆき其こう大藏の某姓庵下誓言ありシ戯言と見

て釣糸の狂言をつくりせりふ

吼噭の狂言

敏滿寺般若坊ニハ耶須、市、弘法とくむ野寺の鑄鍊貫の水松尾寺乃
本堂より死彈の迺り走て千年の星霜とかまの瓦空寺ハ太子天王寺の瓦と
つゝぞ甚しきをばく地の埋て今すら東西の本願ちの坊院家一家のまく清
凜ち龍潭のハ禪の通坊車ふ千嶺の雪とくみ門よ万里の雪とくみ

敏滿寺ハ多賀の山社と犬上郡人

死彈の山々每年首ハ死彈より番色をめぐれトノ万葉土

とにかくにかのハおもひは死彈人のすみよハハハハ

瓦空寺ハ聖徳をゆか走立也

岩山寺ハ世よ嘗のまつよ昔家の遺壇も安土山捨見寺ハ信長の城跡日
本天守の御城も重の堀をもひやう度弓の名額けする御寺也
佐々木の城山観音寺也久保の城も太閤秀吉城の初めほずの城ハ
明智光秀の跡をとり佐々木の流も浦生がよのう六角京極ハ竹本
のりのとせり猪毛三郎も供出の願を知て多勢を以て賤の山城のせり
鎧も後代の名をあけらる

三善清行、明達博洽而得術。數察右大臣道眞殿言之難

奉書於右府、諫致仕曰

明年ハ辛酉而運當革命、二月建卯將勤于戎公冀知其

止足、察共禁分一檀、風情於烟霞、藏山智於丘壑、

右府嘗以累々而留至二月太宰府より左近に

遠景山總見寺禪宗濟家安土山より天正三年織田信長公

御建立本堂額將野永徳筆にて男ハ箕と棒を推り、鞍馬を

鉤く。圖あり。信長公其質

人を以て身をすくめかせけい者とひらひよるる

城を信長々山の退治にて城をの浸み城をまつお明智をして

守しむ其田畠よりまを走今ほり堂とつた者の城なり

供ひの所と知て多勢代り

のより、勢団の如きひづれに構ひひりぬとこはゆり

本堂きわむなむに緒ものと部屋谷郷を生きて田上の供ひの所と

りて石ひるぐる責上る

本の西豊源ハ甲良の庄よりかて道を坂東より傳へ銀波の貞宗より高あり
ちて名をかまくあけく、猿を里め、旧跡をとくめ僧を改季よ吟歌
等はその立處をすて歌名處一百余ヶ所行櫻集よある。あすまか
しの近いハ景ハ駒人景、あれと駒ふれ近所政家のぐくとば
めくは中土の度けろく水よ泥す音声よ清濁よこうちくの言葉
とぞよ葉あらう、一ノ葉すよ

本の西豊後未不考、貞宗よりがまくの賦すよ
猿をくわくの旧跡、行櫻集の記よある。あくまく
門長門方丈化メ、自らうるゝれい、鶴子のうつてはるにあく里
空とのくみ本橋山伏見の里を羽の立場東作をうる餘地うめなず
れう心をすくさむとくすく、あゆみゆくよをくいよ。時うくされ
うう置つき岩山をこ、笠取を立てたるよまくて石山をあま
すえ栗はのまとうて棹丸舟のあとをとくらひ田上川をゆく
猿丸ちまつ草をくつぬ内、さよ、おづけ橋をかさくわよをすくめ
蕨とか木のくじひうひて日ハ佛のまく、且もあつづる

志賀郡のすみの社あり志賀の神

保草瑞光寺元山元政乎不可思議又娘子
江乃加彦根家昌石井矢詩文乃ひ和歌をよくす毎く石山の亭度より
えり道種洛陽の人也元和九年癸未二月廿二日洛一傳より生る
が字俊とす井作あひ仕す廿六年承利譽明暦元年秋深
草法塔の隣に一字を表瑞光寺と号す

寛文八戌中二月十八日卒四十一年

この山堂より住すよおの月からすあらと傳すかれてえぬ
本多さきめやねうすすまかまもせまくまゆゆうあめへ

えぬの様くゆく 銘 まほく 許 六

母と月元りす

あたし手をもえ政の才と其角
手をもみゆ山筋北村拾穂軒再昌院法仰京都松原室町の東
新玉はのじろて住後被召出御歌所成

宝永ニ乙酉六月十五日卒八十二歳

アドの山仰えようき 実・つむ 事吟

賜すうとよとて やあふもさく

近江八景ハ明應九年八月十三日近臣政家公尚通と又子俊本高賴
招請すうとて近江ふゝ掩ゑあひて詠歌の席すとつゆく八景の景

えりす

本中土は西行すく水よ泥す 今成云是ハ水也の他より考るを
りつゝて又山中多水多く醸ノ井の水居さめの清氷其外あまくあり

うの言ふをきみあひ入りようの詞に近江人找をもてりうとく
うとくとくもひ一言のいふあまくすくての詞つうひううう

音あるア 楽くハ近江よすてもよすめ

田を薪よすもあつてもあつてもううう樂く也つまく雅章

かりんせんうるア山樹をニ文キナウ五合と芦をかゝけよありや

是を山樹を外よ平りてナシヌよ實也といふニテを上よナモナモナ

ツヌニタマラ御とつてまく
万事ニテあらむを送りて傍はんをすく附る
りつての神よりもやまとそぞれうすまく
ひの山小ねまくほんそハ我わゆる姓よありやまん
めんそハいつと/or/ハシのうじとかくハいつと/or/

東ヨリ^{アリ}蚕頭をつるり 和名抄織キ田東室 即東室也
今す物語ヨリ 今ハむかに三河の郡司書とみくす持て二人の蚕
頭をまきまけりとるにりつまの蚕 いろどるるよやう化け
ミハ男うそみてよりまへなううからりあすまくくまうく
ぬ事ハ從者アリ半よろて心身をかうもくがまくすアリと蚕
ひの葉のまよ付てくひもと元はてとてやるひにやちきるふ
三四のうてうふさりよめつアリくねかとにはあよるふ大と網
さうは蚕り物のまよ入て蚕くらむてつよりて蚕をくらひの蚕
ひくやまだをせうひときよあらねり蚕一つため網ぬぎあるせう)

トトありとよかくくとて向ひて近てどういだをもみのくひの葉
定よおきあ二筋さうやうあやくかすひて其糸を引らもくゆ
を舊ニ巻つけまにつきまはねハ捕まに安四本又半差とり
のちまつまくねハ大をもくゆて死りくく

東ヨリ^{アリ}一手中若菜まし 政所田原又犬上郡の山方若菜
をつるあらまとやく其糸をむ財のう
きておも菜う秋田くりの軒内女郎もふくよかよ
菜う種を前て生まし財かづく拂れ、拂とひ依て婦の嫁^{フカ}の財
の財おもねとば婦嫁^{フカ}であまひ他のあ^{再嫁}すまきるよとく今
乃世よおもよう嫁れの種あまて菜をもくの切まてうくの袋、
金^ス用ひ古原ますよ。菜まの財の送り翁となくうえをあは
被毛^ス用ひきのうり^ス一
茶^ス極^スり別室單一とつまうあつまうハまうゆの我極^スうの
そきう別室^スハ珠光お色の香茶をつめられまつたあすのわ

て筆多々つづきを寫る者より字源を以て筆をとせしも珠光
の別名は傳せらるりとし、高麗の上を別表たり又まとばー行の筆自
身も自也支を十に刻、一つを一袋、うる葉自せたまへ其一袋を一つの
つる多め半とつみ袋をすます。初音、後音とつみ昔の字ナリと
かく之ニ月ナリヨツムルをとす。ナリ後よつみを後もとて
本朝茶を嘗する。且、豐城天皇の附する是を終て中世
建仁寺の宗祖紫西入宋、茶をひて本朝より通じて本朝
てよりゆきぬ惠と人茶の實を極め、本朝より通じて中世
の園の名今より存せり。公方より滿不と申り、伏見より通じて中世
仙を養ふ所の茶と極鮮をつむの術を傳へ大内氏の人をして宇
治より植えしる。其後森税長井氏の手をして茶を製す。其中
森川下の公方家の茶はあつる。武衡家の園を朝日と、京極家の
園を祝と、奥山とりく近世上林の茶へ丹波上林のマドウ居を以
てよりて日を遡ひ慶すなむ。又近世京洛橋の右どくと申る法
師とその弟子尼をかすへ諸人子弟を施して修業とし其尼

申樂の狂言の御歌

類聚國史、弘仁六年四月辛近江國志賀唐嵩便崇福
寺入御 中畧大僧都永忠手自煎茶奉御同年六月令義
内井近江丹波播磨おノ国殖茶毎年献之

世より川魚といふもの、湖魚のよろずりゆゑ、拂土のよろずみを仰
りて大網差網四ワキ竹掛手丸唐網鉤筈カリ竹瓶をさ
りまくのありとゆふ。

倭漢三戈圖會漁獵具危儀氏結繩而為網罟。
藏網今之唐網字彙云巻ハ從上掩之網也
擣網、杖網流水の中の小魚をすくめる具也
文邊、註網形如箕形使役廣前也
力りくハ此一般よりあみをおひ、一般よりよせ一般を仰
をすくめて向づくうう網の中へ魚を追ひ、船をよせあみを、
うあけ魚をもくろひをかりくとひる
綽網 又辺升ありあ人其升を以て水海をかねて魚を追ふを

てとも異なりけりひすアのまみかりくよ

坐署 提署 篓 水中の魚をとる所也

簾 胡簾 魚梁 竹笱 篁 箕

万系 山河を筌乎休而

古今ニ始ニやふるえハ川漁をくらむるを浪の花と云ふまことなり

鯉鮒ハ惣名にて鯉の品類鮒のあらざい其名かと云ふいふ者有

山吹のふとひき秋山鱗よりまたとちり江鱗 鮒の名と云ふ鮒鐵の味を

ミクツムヨシカトと鉤と名つけ鰐をモ城下千里を走るも江や勢田鱗和

尔鯉水魚ハ近江よからず内膳式と田上に取近レタルア半治ニテトル九月

ヨリナ一月マテ供之水魚チトノモノノ網代ト云也

不賀比 鮒ノフト鮑ノカト鮑ノヒナ合テ其形トヘル魚也鮑小鮑競鮒水鮑子

山水鮑 キハ鮑蟹小鮑 晴

圓龜石龜のいじ懶ニ魚をまつ川

太郎丸角力を好く

アツヤ狗鰐小鮑子

君々かくもあめりハ川のあまらすおきのくよ見えり

是ハ太刀魚也アリありの石舟と云ふをすとぞうれいかつるまへあ

づそら、小魚の通名スルアリ

ま木魚 後種新兵田上に作るにあつ入江のアツヤ魚の名

もかくねるくらえりハよめる

にうるきみの月のやうにバクをあらうの故とある

うなきハ万葉十六、かつやせよよとつうもの武奈岐とアメを

むるまにてうなきハ訛轉す

字長日記 庭の山あるよりあられアヤガカドウキの声すく

セキアラ魚の山水えんとアヤガカドウキすもう

和名柳鯉アノカジカハビカラカユとカラトコリトカラアトト署してよへあがる

よやカマガリイシグインモ千社主魚同類アリて土地の流神かれよや

京すてコリ近江をイシフニ大坂モイシモキ城あらモカクブリ九筋又

トニホ東山をカシカヒ

慈王城五十里をちげま不考

水魚ハ近江よかるる 文中自註あり

鯉射の鮭鱈スズキくらひのうよ／＼人の氣る魚うり解又乃うり
あ／＼魚上のぬりうれは源三位をすみじとす宇治川を難虫桶教改
とつる西題をうて一首よもぎやと作をかうめと

宇治の源くのぬらくおゆうの水をけまいうにうまきまくらん
海橋和歌集を用こゑのむをまよ水を付ておこきてせんれい
宇治山のあまをうしハ毛尼のとゆくとくあくとあくま
射々競よ御くうろこの色が玉一味ひよりくと貴多く佳ふく
はハヤよ御うとつるハひアの川をとくハヤくう小魚のう

山吹の花と咲く 鮎をすれ 絆六

川太郎を角力をゆく 追ひの里修を川太郎小笠の妻シて人よ写
とう角力よせんうく角力よせんう時より人をよそうすまひよせんとつ
時ハ追まとりす 水東カワハス川太郎

川太郎の害を去 菅原相の古歌 俗傳よつよ

物のよきとて事よ 助四の矣 痘

川太郎を角力をゆく 追ひの里修を川太郎小笠の妻シて人よ写
とう角力よせんうく角力よせんう時より人をよそうすまひよせんとつ
時ハ追まとりす 水東カワハス川太郎

川太郎の害を去 菅原相の古歌 俗傳よつよ

いすゞよやまくせとすすみよ 川立男氏をすゑる

雄黄一名鷹石都で毒虫水怪をさる常よ大人ゆ兒小塊をすて
船を大津百艘と移す八百の漫津く浦く大丸み小丸み小くや川の垂ハ
大名船了頃傳焉り川舟をア殿平を大石をア將、耕作の助也准取弓馬
棚す一舟塙田船比良のハ講、み人湖上の風をあく諺義とハかせの定
らぬとつトイチとハ日和風ハヤテえ雨をまき、伊勢田風、伊吹風やマセ
風十カセ風サキ風ハ春冬の名すて秋を日あじと根子トハ湖上の風の名す
て宮内アハ縷アハ船をなみめ对佛老人ハ路跋桜と吟す

万葉七 風すりの風すりの考のうのう

浪の海の海浪かことほ守り争をやむくねとへすに
二月廿四日ハ比良八講湖中船を出たの風をやむと故也風の定めを
諦めといふすり瀬田風伊吹風やませ風なうせ風さき風やまえ
の名すり秋を根子トハ春をハ伊勢東風やうお東風をのうめハ
いぬ風、吹き西浦をのう風をさくの方ののあち伊勢あじつす
吹きすりの海の意神舟吹生源へいふのかくよと云

花さくよ比良の山吹ゆきやく翁の峰スモニ

御佛老人ハ山神月風和尚詩ニ有テ

湖上花

山風かの風色花ス今眼入る志望の脣

雪橋近辺の不二也三上山

桐雨

花や浪軒の下す

春の水秋吹ホウモウを柳鏡

嵐雪

日節桜の色よ多う赤橋

一ノ許云

アメシテ近辺の人ノ役丁外

人外

大風吹と鶯聲も落葉は廣くすゞらしく

人外

播磨大野村か

人外

門苔より呼都子をき花摩

人外

アメシテ近辺の人ノ役丁外

人外

ある水や砂漠のまがる牛生島

人外

宇治川をりまよ二人やくをる

人外

ある水や砂漠のまがる牛生島

人外

東海のおりひゆよせんあらはるに老うるの森のねやのこころて資

王の後乃郁子 葬 甘子

近いと蒲生郡奥の島村王の後より生る蔓草甘味す昔天武帝、大友皇子のために難をうけばくは居りて王の後の名えはすある村民は長年の者ありおも官軍より朝故をそじ後より帝長壽守つゆゑんをあひてすりふ村民は蔓草をうめの長壽にて子孫繁昌すといひるへせり時より相日朝也是より毎年相續して郁子の節會と無行せらる今に終て毎年村老をく十月下旬より

文應 緒旨の葬と記する迎年郁子とあらず

くくすりれんえとあるき處むべあひのうけこのくに

芝山宰相

草のくわあくあれハあぐもとを今年とやうくせあらうる

王の後ハ東の後の内に權をもす者より七月一日毎年林中に軸す

郁子ハ實の大きさニ十斗より皮ハ青く肉も黄はれて袋あり蜜柑玉似小豆う切ハ袋ね十石ありて十六角の形より數をつまつと一合を

つま

在土は西ざくら神の社あり一村の鎮守く神ある森の大木ありむかし
若堂家の先祖は村より居て時うけ花を植えたり後伴賀より
大寺とすれども今より入るやうて花をさくとあり村中因
姓を名のる者すらうどつ

栗太郎の栗の木 古く栗の大木あり其株ぬ十里とはひく故に栗本と
ゆふ今も地を引れハ栗の木又枝葉あるとつみて里人禁本に
用ひるあり土中より生れ共栗の葉ありともうる

昔天智天皇の世ニ年近は栗太郎盤城の村主殿とひく人の妻の毛
み出らる空より鑰匙ニワカアリてありのをまのむとあるまくまく其
家を書きしる書記より宝つての画と鍵あるは是よりやめりん

花の木を駒郡 花沢村南小二村あり
花の木あ村よりありたあつてつとせあらうとつるをかくる者
多く花をさくものゆくゆく実をむすふりす葉ハ秋よしれが葉
すと枝葉さくとばかりの木あるかくは花の木の
よもあらむりも神と祝ひて妊娠安産を祈るばかりあり

共本の葉を掌てハ産ムあやまちすとひづ

太翁のあねみハ星鬼キニギの火と裏す

太翁と太上川と善利川の名湖水の底より彦根の城近し。
ひふむかう今よはれに西野人西小山シノヤマとくべ乃
えり裏よつて金乃し袖よぬうつる体の火ヒあらひのと星鬼の火
とくべ又残ぬる裏の火とくべあらひのとくべのとくべかき
らぬ小のきくあるお裏笠アリカスルひとくわらす者あらひ忍耐コリセイして裏
の毛アラの茎の火とくべあらひのとくべ是を拂へ多もの裏の毛アラのとくべを動
づく笠の雪アラシの火とくべあらひのとくべもくくさくうくわらひのとくべを動
せぬ毛アラのとくべ又自然は拂へ又湖中の水ミズあらひ火あり

老子庵筆記又つ

田野タノま苗稻穗イナヒ雨夜ウクヤ火起ヒカラる是古戰場オニヒの鬼タケす

鬼タケすの火といふはちくわらひのとくべ

かくえみき火をかく方カクカタ心ハコの鬼タケすの火ヒカラは表里エビリの

信實

花の本

文周女寫生

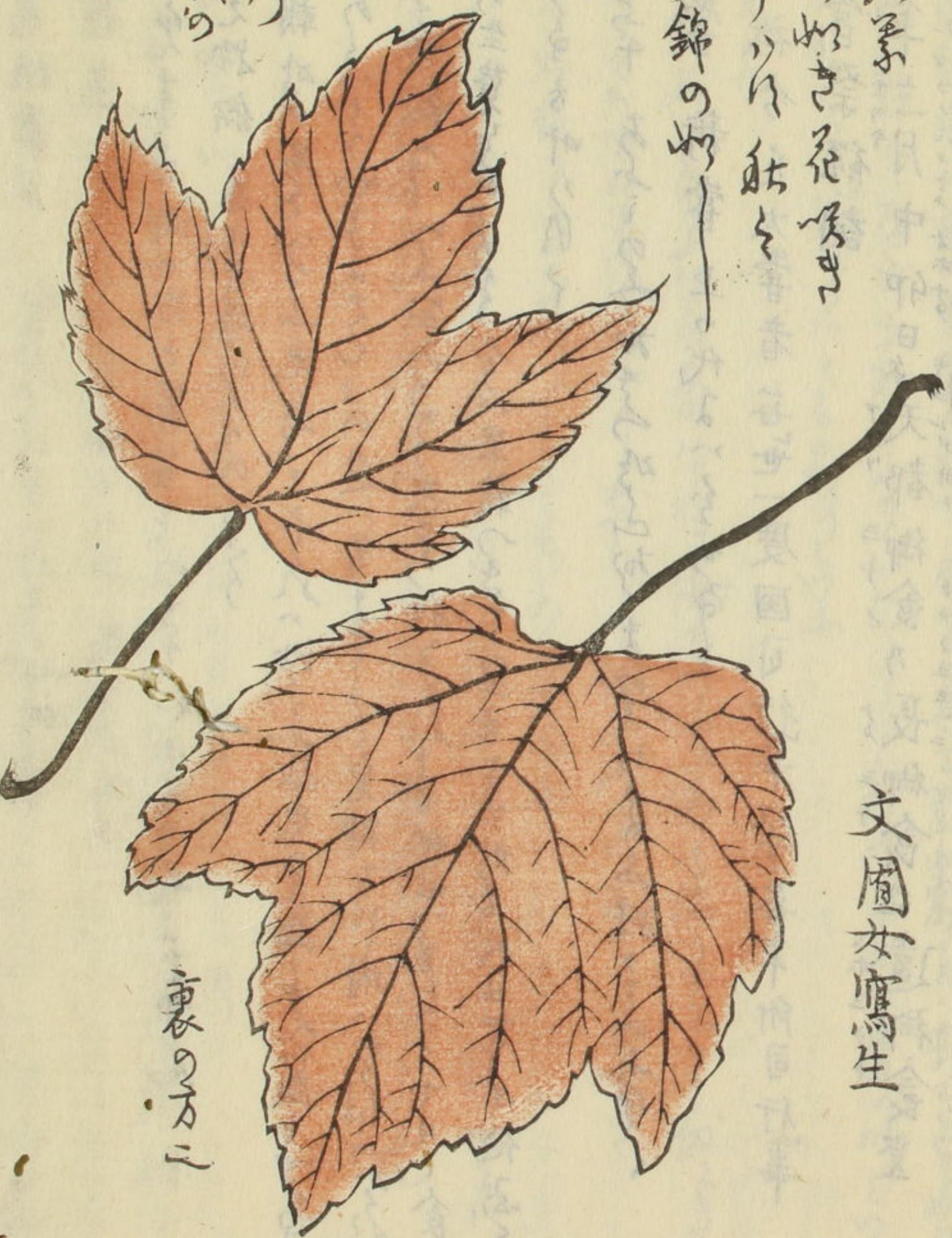
春々搖りかき花ハナせ

寒クチはむすりに枯カルく

かゑり錦ツバキの火ヒカラ

花の本乃
美乃表カタり

裏ハラの方カタ



清氏松草子 かくいの心地にて
新恆集 十二月毎日の祝鬼をよめり

免する都の因と裏笠をぬきしと今有くよるやん。

保之物船為とせりくのうる

為朝坐の名を冠す鬼を遣すよりハ汝うよ、除鬼の事無くまへゆる。宝あらうじくせよそんとの事ハ音まき——鬼神なし附ハからひのふくの笠うき履鉢をつゝ室あへり其の如私すくとも他云アモトナリて日も食ひ人の生費をとらう今ハ累報つまし室もアセ形も人よがりて他云くやくも叶リハ

万五千 あふみのみおもへぬ山あくまけてりうの株うみのあく

大嘗 新嘗上代ニハモうちる

神祇令允大嘗者毎世一度国司行事以下毎年所司行事

大嘗祭祝詞

今年十一月の中卯日尔天都御食乃長御食能遠御食登

皇御孫命乃大嘗闋食半爲故尔

豊明節會ハ卯の日の家主はて辰の日^{トヨミツテ}豊明節會^{トヨミツテ}、高き^{タカシキ}めりと
ノ共ハおもてを史立あへるくおひく^{オヒク}かやくをとよ豊の門^{トヨ}と
丸ね高^{タカシキ}御^{ミツキ}御^{ミツキ}ハとよの門^{トヨ}と

万葉十九

豊明節會ハ卯の年の、牛猪の雄の^{ウシイノコ}、ある擣^{タマ}すよ^{タマ}、毎と^{タマ}せ
け^{タマ}と^{タマ}きのき^{タマ}と^{タマ}、直^{タマ}く^{タマ}、使^{タマ}すと^{タマ}る^{タマ}と^{タマ}と^{タマ}。
うつ物語^{ウツモノガタ}とよの門^{トヨ}と^{トヨ}もあけあく^{タマ}み
御^{ミツキ}ハ大嘗秋嘗^{トヨミツキ}モ^{トヨミツキ}御^{ミツキ}何^{タマ}付^{タマ}す^{タマ}よ^{タマ}を^{タマ}後^{タマ}せ^{タマ}、
にいぬめの御^{ミツキ}よ^{タマ}か^{タマ}う^{タマ}か^{タマ}う^{タマ}て是^{タマ}セ^{タマ}豊明^{トヨミツキ}の御^{ミツキ}と^{タマ}いふ

前磨山ノ賦 磨山者丸山也在肥長寄^{モモ}舞之地也 ま孝

七月十四日ニ万石の印徳と^{タマ}女^{タマ}新^{タマ}を^{タマ}ける物語の日
す^{タマ}一^{タマ}け^{タマ}ほのた^{タマ}もの^{タマ}人^{タマ}ス^{タマ}れんと^{タマ}す^{タマ}の^{タマ}の^{タマ}の^{タマ}
逃^{タマ}れ^{タマ}ゆ^{タマ}き^{タマ}め^{タマ}せ^{タマ}れて^{タマ}え^{タマ}す^{タマ}き^{タマ}か^{タマ}く^{タマ}む^{タマ}か^{タマ}く^{タマ}う^{タマ}男^{タマ}の^{タマ}れ^{タマ}

とてうそでやうへうまうはは草のせようれで名をあざなりとすと人ら浦のと
うひにあざる人今すとあざる物がちひきうれど左の翠巻
シシヌのそんて瓶のをきあすくんそくかあはなき充とひふすり行心
うくと茶漬食とおもつる青の花入瓶よりあくびんとひまきいとく
よう列て物がりあるとひとんとそれもありたよお見られ

草花の名と旅宿せむ虎と

東日記

けり化りま考うつて行脚の記す

七月十四日に一素行よいとあり下に清水も詣り
け文はめよみてくみハ二万のみのとくは本へはめよかくと文意
けよゆうすう倩水すへをす祝意る
同日紀すと元和戊寅七月長寄
は日十里亭すいもけるは洛の去あよやうせうひて文西よ風雅の
眼をきし長寄み即ちすむとあよいをせるおのとせすけ地す
来と酒またの者ふらとくはつ下の風流離つみよかくむ

錦襷を継よもいとく日取付ま考

十日た山の賦あ

十日流の去來きくくかくくけんく入母の裏みて秋の木繁
支とあづるすと一け日暮よ會てあづくみみのとめづらりへ

タチ 番て役あくら

都

人

ま考

社年魯町と骨肉のるすて即ち素行共のうとすとおりしき
外の人と入つて大草うに野童うに野やもとん正秀へいに立ちつけ
秋やまくさんせぬうに野童うに野やもとん正秀へいに立ちつけ
まつてやまくさんせぬうに野童うに野やもとん正秀へいに立ちつけ
戸よやあくととひ宿をひくむふとく

そくきい乃故よとづかへ嵯峨の柿 去来

ス

柿ゆきのゆきかうて旅宿う所 ま考

年方も長峰ゆきかう

ア 郡も旅宿かうとま考 ま考

魯町うりくとま考

ス

山とやを入るを、是、近へ
浦人をもせし月、かく

唐の船とて、人のぞむす
舟とす。つけ舟を、候まく

小舟とて、七夕の舟

七夕とよけやあくふ

と、後又の女舟を、とくへ雨を打る

五、寄

うちつけ星行都や浦乃ぬ

長寄のちやみよす
息長寺御令神^{后皇}加羅^{シキ}を、征^{シテ}我^{シテ}へ外^シゆき
けめで貢物^トあさめ^トひら加羅^{カクシ}と、う^ト被^エの^トき^トて三韓^ト
にを、う^トか^トか^トか^トか^トか^トか^トの^ト唐^トの^トま^トか^トと^トて唐^ト
物^トう^ト加羅^トの^トは^トめ^ト貢物^トへ^トく^トか^トひあくと^トく

後齊山ノ賦

古來

十月八日は、よきちうひありて、近き山ちゆう佛^トあむきみのためとす
月詣するなり^ト唐^ト入つて、渓^トハ浦人の氣を、うむよ
秋風うねられて、ハ鳥の葉^ト、頽^ト枝邊の厚^ト大^トなる^ト吹^トされて、
わゝ人の心^ト、ひびき^ト、あんま^トゆる^トきせを、ちぎり^トする^トに、せり
下にゆること一すぢよおか^トと、人^トあや^トある心^ト、うる^トれて、か字
一^ト人^トゆり^ト人の心^ト、ひびき^ト、物^ト、あもつむ^ト、羅^ト波^トの浦
のあく^ト、いも^トをとひすうに、參^トのすりあゆ^トとの、お^トか^トあづ
と都の高^ト人^ト、よも^ト袋^トひき^ト、あめ^ト、え^トと^トやから^トう^トといひ^トく
き年^トの、やこ^トう^トめ^トを、西^トを^ト切^トには、あ^トの、賦^トう^トと^トの、あ^トれ
て、ほの賦^トの、内^トと^トは、う^トある

鷹^トつよ^トと^トの、頃減^トか^トまく

東日記より

西花坊^ト禿^トの賦^ト、つきて乞^トを、後賦^トと^トの、素行^トの、記念^ト
あ^ト侍^トあ^ト後赤壁^トの賦^トゆく^トう

あの賦ハ未の上をりひ後も草花の前とひかへてのち
花にゆきてゆきをかく後賦をすくてた女の上のうるきを破の
厚とひ前後つ戸のみへよちきりとと壇をかくめて文とく
ま那れも其が諸の躬と日ゆよ著る其音り伊勢か大澤まゆ
泉昂場よつけ又能あ博多よす肥あ五戸よ後浦よ寛永辛巳
年今長崎とる風土鳴よてを月雪海へをよ橙を挿て醉よ
用や琉球芋子赤白の二ふあひ赤萎あく大根うみへテラモヒ
つよ長寄市中海岸よあとける故よ石階辛一風俗う婦人生涯眉と
利川指み金袖と入つ放言辛一一とあすそとばお姫ス娘をヨゴ人の
妻をナカワサニ色情をシヤニス石壇をキハ四とバセウ村里ろくとコレミネトアモ
スアツ唐辛とキヤニヤウ物をあらわしシタカジイ是をとコレミネトアモ
マワト秋又とキヤニヤウ物をあらわしシタカジイ是をとコレミネトアモ
ルハの程赤城ノ雪中庵葵太、五月のやあるねひもにれの月とつる
を感して詩を賦して送りす今雪中庵よ藏す

唐僧の西行記序の別とつま

詩六

風物文選

田上トツム山ふも

山あはれ魚くふうへチ 甲羽の阪
桟のあはれ舟さむるや 秋の室

田あ冬日

冬日やも、身せまよ

身もと今かぬや りくうち

足のト

水多のくううりや

水多のくううりや

ちすみよつよよせ菩薩を八月廿日 東ちう箇よつ
唐人入浦の事に神を立朝暮あけちうよ
金被とゆしてこくく舟共オ一鳩祖又姥媽とふく福妻
無化林氏の女自ア大海と神とア神鬼靈現活潑の船とちう
天妃聖母の事と神とア神鬼靈現活潑の船とちう
跡玉冠の上よれ産をくべき左右よき神天后の東号
舟と名すり各異邦の事とくい入浦の時舟を承ようおう
十禪寺村唐人船入路次金轂ちうよくをくわづくわづくわづく

守護す内帆の付く船の内一又長嵩よ唐人の寺あり南京より白福寺
寺福弘と崇福寺と漳州り福洲も名禪宗も其壁の寺す
八月廿二日出寺くよ菩薩をあり唐人い日余詔て手を捧を
もちてぞくくいとぞうきくとつ十禪寺やさきる多ひく近く是
嵩山寺中より多かぬ唐人余詔の内すとぞあみハ四はすとく
そくの内甚き也すとてあこ無あり
不ぞもくわがさまづるに秋なり

夙夜文選大註解卷之五下尾

釋甘藏校

